

シンポジウム／声・歌・ことばの力

## ロシア口承文芸学の課題と使命

齋藤 君子

ロシアの口承文芸学（フォークロリスチカ）はゴルバチョフがグラスノスチ（情報公開）を旗印に掲げて改革に取り組みはじめた二〇世紀末から大きく変わった。それ以前の口承文芸学が研究対象としてきたのはもっぱら古典的伝統的フォークロアだった。散文伝承についていえば、昔話と伝説が中心だった。古くから伝承されてきたものに重きを置き、より古いものほど価値が高く貴重だと考えられていた。研究者の関心はもっぱらプロトタイプの探求にあり、長い歴史の中で生じたさまざまな変化を歪曲ととらえ、その歪曲を除去することによって原初の姿を再構築することに意義が置かれていた。

こうした流れの中では、同時代人たちが家庭や職場などで日々交わしている、生きたフォークロアが研究対象として取り上げられることはまれだった。一九七五年にモスクワで出版されたポメラランツェヴァの『ロシア口承文芸における神話的登場人物』<sup>〔1〕</sup>は例外と言っていい。書名に使われている「神話的登場人物」とはキリスト教以前の神々、すなわち家屋や自然界に棲

む精霊や妖怪たちを言う。国家が宗教を否定していたソビエト時代、これらの存在を信じることは時代遅れの迷信とみなされ、これを学問の研究対象にすることさえ難しかったので、苦肉の策として考え出されたのが「神話的登場人物」という用語だった。こうしてタブーを破って発表されたポメラランツェヴァの研究は現代フォークロア研究のさきがけと呼ぶにふさわしいものだった。政治的制約のため、ここには話自体の記述はほとんどないが、出版できたことは自由化のひとつの兆しと見ていい。

口承文芸学を取り巻く状況が一変したのは、一九九一年に起きた社会主義体制の崩壊以後のことだ。政治的束縛から解放されたロシアの研究者たちは従来の閉塞的研究から抜け出し、同時代を生きる人びとの精神文化を記録し、分析する仕事に意欲的に取り組みはじめた。その牽引力となったのが一九九四年に再刊されたフォークロア専門誌『生きているむかし』（季刊）である。このあたりの経緯については拙著『生きているむか



『生きているむかし』誌  
2008年1号

し』誌創刊に見るロシア口承文芸学の動向」(『口承文芸研究』第十九号、一九九六年)に記したとおりである。再刊一号の巻頭論文の中でプチロフは「全体主義を放棄したロシアにとつて現在残されている切実な問題は、獲得した自由をいかに行使すべきか、社会の幸福のためにその可能性をいかに利用すべきかということだ」と述べ、自由の門の前に立つロシア口承文芸学の進むべき道を模索している。

この雑誌の既刊分五七冊を眺めて目に付くことは、伝承の担い手である「民衆」という概念の枠が広げられたことである。マルクス・レーニン主義では民衆とは工場労働者と農民と規定されていたので、そこから当然、口承文芸の担い手は農民が主体とみなされた。したがって、口承文芸の研究を志す人たちは遠く離れた農村へ出かけていって語り手を探し出し、話を記録してきた。しかし変革後の現代ロシアでは、農民と工場労働者だけが民衆ではなくなった。都市で生活している学生や教師も、プログラマーやパラシューターといった近代的な職業に就いている人も民衆であつて、それぞれに独自のフォークロアがある。その一方で、古くから語り伝えられてきた伝統的な口承文芸は都会から遠く離れた農村へ行つても、もはや伝承者を探し出すことが困難になつていくという現実があり、研究者たちは都市住民の間で語られているフォークロアに目を向けるようになった。ロシア口承文芸学は研究の軸足を消滅の危機にある伝統的フォークロアから現代フォークロアに移したといえよう。

現代フォークロアは近年になつてはじめて登場したわけではない。そのさがけとして挙げられるのは一九世紀末に生まれ、二〇世紀初頭に流行したチャストゥーシカとロマンスである。チャストゥーシカとはテンポの速いリズムに合わせ、即興で世相や風俗を読み込んだ、四行詩から成る歌謡で、若者が演奏するアコーデオンのリズムに合わせて娘たちが輪になって踊り、この歌をうたつた。一方のロマンスは恋をテーマにした、ゆったりとしたテンポの抒情歌で、その多くは文学に題材をとつている。このチャストゥーシカとロマンスの出現を新しい民衆詩の芽生えとしていち早く評価したのは優れた民族学者ゼレーニンだった。

都市フォークロアの蒐集と記録の面で先駆的な仕事を残した人にE・Z・バラノフ(一八六九・一九三四年以後)がいる。ここで彼の仕事について簡単に紹介しておこう。バラノフは数奇な人生を歩んだ在野の人である。孤児院で育つたあと、絵の勉強をするためにモスクワへ出てきた彼はナロードニキの運動に加つて逮捕され、数ヶ月間投獄されたあと、故郷に強制送還されてしまう。彼はその後各地を点々としながら新聞に暴露記事を書いたり、市場で本を売つたりして日銭を稼いだ。バラノフはどこにいても精神的に街を歩き回つてさまざまな種類の人びとに会い、彼らが語る話に熱心に耳を傾けた。そして宿に帰つてからその話を思い出しながらノートに書き留めた。当時は話者の目の前でノートに記録することはできなかった。

そんなことをすれば、話者が当局へ密告されることを恐れ、口をつぐんでしまうことは必定だったからである。バラノフが苦勞して記録した話の中には当時の新聞や雑誌に掲載されたものもあるが、長い放浪生活の中で紛失してしまった記録も少ない。

一九一一年、バラノフは再びモスクワに来てアルバート通りに住みつくが、不運なことに一九一四年に転倒して足の骨を折り、杖の助けを借りないと歩けなくなり、乞食同然の生活を強いられる。さらに不幸は重なり、一九二八年に彼が住んでいた部屋が火事になり、手書きの文書の一部が灰に帰した。焼け残った文書は幸い文学博物館に買い取られたのち、中央国立文書館に収められた。彼に関してわかっているのはこのときまでである。

バラノフがモスクワのフォークロアを蒐集しはじめたのはモスクワに住みはじめた一九一一年以降だが、ロシア革命以前の記録はほとんど残っておらず、革命後は生活に追われてそれどころではなかったらしい。彼が再びフォークロアの蒐集をはじめたのは一九二〇年代のはじめである。インフォーマントとの出会いはほとんどが木賃宿か安酒場だった。彼の話し相手は行商人、御者、乞食、日雇い労働者、放浪芸人といったモスクワの最下層の人たちだった。彼が集めたフォークロア資料で生前に公刊されたのは、一九二八年に出版されたわずか五〇頁の小さな本一冊である。残りの資料は本人が出版に向けて準備し

ていたにもかかわらず、当時の出版社に価値を認められず、生前に日の目を見ることがなかったのはひじょうに残念だった。これが『モスクワの伝説』<sup>(2)</sup>と題して出版されたのはバラノフの死後六〇年を経た一九九三年のことである。

現代都市フォークロアの蒐集と研究はその後の長い空白を経て、現在、モスクワの人文科学研究所のネクリュードフ教授を中心としたグループによって精力的に進められている。その成果は二〇〇三年に出版された論文集『現代都市フォークロア』(S・ネクリュードフ他)<sup>(3)</sup>にまとめられている。以下にこの本の内容をかいつまんで紹介しよう。

現代都市フォークロアは階層別、職業別、集団別、年齢別に伝承されている。集団ごとにその集団のメンバーだけにしかわからない文化コードが確立されていて、他の集団との間に共有の世界観と呼べるものが存在しないのが特徴である。伝承の担い手は農村の伝統的フォークロアが古老であるのに対し、こちらは若年層が主体である。伝承の閉鎖性と透過性という矛盾する二つの側面が見られることも、現代フォークロアの大きな特徴である。秘儀性を秘めている一方で、インターネットなどを通して情報が瞬時に世界規模で拡がることも珍しくない。集団としてはプログラマー、消防士、人形使い、パラシューターなどが所属する専門分野別の職業集団もあれば、アルピニストや旅行者、ヒッチハイカーなどといった趣味で集まる集団もあり、学生、兵士、囚人、入院患者などのように、一時的に身を置く

集団もある。

これとは別に、現代フォークロアには家庭内でひそやかに伝承されている話がある。家庭内には繰り返し、繰り返し、語られる話がある。戦争のときのつらい体験であったり、たいせつな家族を亡くしたときの話であったり、家族のだけかが遭遇したふしぎな出来事であったりする。その話に反復性、類型性が認められるなら、それはれっきとした現代フォークロアである。

このように、現代フォークロアは集団内や家庭内でひそかに語られることが多いが、そういった話を幅広く集めればロシア民族の精神文化を明らかにすることが可能になる。一九世紀に活躍した詩人で文芸批評家のP・A・ヴァーゼムスキーは「うわさ話とは人類の普遍的物語」であり、「社会を映す鏡」であるとし、「モスクワの往来や家の中で飛び交っているうわさ話を集めれば、たいへんおもしろい年代記ができあがる」と述べている。彼のこの言葉はまさに時代を先取りした、卓越した見解である。

以上が『現代都市フォークロア』の紹介である。ここで、現代都市フォークロアにはいったいどんなジャンルがあるかを見ることにしよう。現代フォークロアには階層別、年齢別に形成されている集団ごとに独自の伝承があることはすでに述べたが、それらはジャンルではない。では、現代フォークロアのジャンルにはどのようなものがあるのだろうか。

散文ジャンルで筆者が思いつくものを以下に列挙してみる。

1 怪異譚——霊と遭遇したときの体験談で、実話として語

られる。墓地の跡地、屋根裏部屋、地下室などの呪われた場所、あるいは新たに誕生した聖地にまつわる話もここにはいる。

2 小噺——最後に落ちが付く、短い笑い話。世相や政治を風刺した話、エロチックな笑い話、ブラックユーモアなどがある。

3 怖い話（ストラシルカ）——子どもたちが怖さを楽しんで語る話。

4 物売りの口上

5 ナイーヴな文字伝承——文字による伝承という意味では、伝統的フォークロアとは異なるが、内容がナイーヴであり、類型化されていて、個々にヴァリエーションがあることなど、フォークロアとしての特徴を具えていることから、現代フォークロアのひとつとされている。アルバムに添えられている言葉、子供が書いた恋物語や怖い話、無名の民衆が書いた自伝などがこれに該当する。路線タクシー内に張られている掲示もここにはいる。

二一世紀になつて伝統的フォークロアを取り巻く環境はますます厳しさを増している。ロシア昔話に関して言えば、幼時向けの動物昔話や累積昔話についてはまだ語り手を見つけることができるし、家庭内だけでなく幼稚園や学校、劇場などでも語りがおこなわれている。しかし、魔法昔話についてはもはや優

れた語り手を見つけることはたいへん困難になっている。伝説に關しては魔法昔話より状況はいくらかまじりだが、歴史的事件や歴史上の人物にまつわる伝説、地名の由来などに関する伝説を知っている人を探し出すのはかなり難しい。

英雄叙事詩のようにすでに完全に伝承が途絶えたジャンル、あるいは魔法昔話のように今まさに危機に瀕しているジャンルについては、これまでに蓄積された貴重な資料をいかにして次世代に手渡すかということが現代の口承文芸学者に課された重要な課題になっている。大学や研究所などの図書館に保管されている手書き資料の整理と出版、古い資料集の再版、アナログ資料のデジタル化などの作業が現在活発に進められている。

もうひとつ、注目すべき動向として、コンピュータを用いて昔話を分析し、それを基に分類しインデックスを作る作業が進められていることがある。その成果のひとつとして二〇〇五年にモスクワで出版されたB・ケルベリテの『昔話のタイプリトワニア昔話の構造的意味論的研究』<sup>(4)</sup>がある。

神話研究の分野では、ベリヨースキンによる電子データベースの作成に注目する必要がある。『生きているむかし』誌二〇〇五年四号に掲載された彼の論文「遠い過去の神話」<sup>(5)</sup>によると、すでに神話モチーフのテキストの要約三万五千と、主要モチーフの分布地図千二百を取めた電子データベースが公開されてお<sup>(6)</sup>り、その後も逐次修正が加えられ、増補されつづけているという。比較的近い将来、全世界の口承文芸資料、神話資料

を収録する予定とあり、今後の進展がおおいに期待される。

注

(1) Померанцева О. В. Мифологические персонажи в русском фольклоре. М., 1975

(2) Московские легенды. Записанные Е. Барановым. М., 1993 その一部は拙著『モスクワを歩く 都市伝説と地名の由来』(二〇〇八 東洋書店)に紹介した。

(3) Современный городской фольклор. М., 2003

(4) Кербелите В. Типы народных сказок. Структурно-семантическая классификация литовских народных сказок. М., 2005

(5) Березкин Ю. Е. Мифы далекого прошлого. Электронный каталог фольклорно-мифологических мотивов, содержащий около 35 тысяч резюме текстов и показывающий распространение около 1200 мифологических мотивов.

(6) <http://www.rubhenia.ru/folklore/berezkin/?localendar=1>  
(ろくごじゅう・きみん)／ロシア口承文芸学)